点字使用の学生に対する簿記の指導法について
― 仕訳カード・簡易仕訳カードによる簿記の教育 ―

筑波技術短期大学客員研究員[1)] 同情報処理学科[2)]
大橋克巳[1)] 隈 正雄[2)]

要旨：点字使用の学生に対する簿記教育のために仕訳（しわけ）カードの使用を提案する。この方法により、仕訳と簿記の処理の流れを理解させることができるものである。
仕訳の理解に関しては、 仕訳カードを使用した。これにより、点字を使用して仕訳が理解できる。簿記の処理の流れの理解に関しては、簡易仕訳カードとファイリングの方法を提供した。これにより、点字を使用して、仕訳から試算表までの流れが理解できるものである。
これらのカードとファイリングの方法を使用することにより、点字使用の学生がより容易に理解できるものと考える。
キーワード：点字 簿記一連の流れ 仕訳カード 試算表

１．目的と背景

現在のような複雑化した経済社会に生きている私達にとって、あらゆる局面における意思決定の合理化は、重要な問題となっている。この意思決定の合理化に有効に機能するもののひとつが、会計学である。本稿では会計学のうち、企業会計における財務会計を対象として論を進める。

この会計学を習得することにより、ある程度の不確実性を廃し、合理化した意思決定を行うことが可能となる。すなわち、企業の提供する財務情報を基礎に、その企業に関する判断の合理化が図られるからである。しかしながら、この会計学を有効に理解するために、会計測定の局面で不可欠な技術である簿記を理解しなければならない。

簿記は、企業の経済活動を仕訳という固有の技術により把握し、企業の財政状態と経営成績を表す貸借対照表と損益計算書等を作成する技術である。簿記の理解は、会計学の習得の前提となるものである。

視覚に障害がある場合、特に点字使用者の場合、仕訳という概念の理解および財務諸表作成のための簿記一連の流れの理解のために、いくつかの工夫が必要であると思われる。すなわち、一定書式への記入・表の多用といった点字には、なじまない部分があるからである。この部分に工夫を凝らす必要があると思われる。そして、簿記の基本的流れを理解することにより、会計学の理解に資することができ、ひいては合理的意思決定の可能性の拡大につながるのである。

本稿では、点字使用者を対象として、大学での講義を前提とし、簿記の基本の理解を目的とした指導法に関する前述の工夫について述べる。

２．会計学における簿記の意義と問題の所在

現在の会計学における簿記は、複式簿記である。複式簿記とは、経済主体の行う経済活動を勘定科目と貸借記入原則によって、秩序整然と記録・計算・整理し、その結果として財産計算および損益計算を同時に完成する方法である。またその複式簿記の基本的概念であり、財務諸表作成の第１歩である仕訳とは、取引を要素別に分析し、「①いかなる勘定に記入するか。②その記入は借方か。貸方か。③その金額はいくらか。」といった三つの事項を決定し、仕訳帳に記入することである。この仕訳は、会計実務上不可避の技術である。また、仕訳は、複式簿記一連の流れの起点となるものである。

このような仕訳という簿記固有の技術に経済主体の経済活動、すなわち、取引を把握し、これを起点にし、元帳への転記により元帳を作成し、さらに、財務諸表作成の基礎となる試算表を作成する。上記の簿記一連の流れをいかに理解するか、または仕訳自体をいかに理解するかが、重要な問題となると思われる。視覚に障害のない場合は、一定の形式を有した普通仕訳帳・総勘定元帳・試算表のそれぞれへ記帳することによって、その理解を深めていく。

点字使用者にとって、一定書式への記入・表の多用といった点字になじまない部分を克服し、仕訳自体および簿記一連の流れをいかなる方法で理解するかが、問題となってくる。

以下、試案を提示しながら、この工夫について検討する。

３．仕訳自体の理解についての試案

３．１　概要

会計学においては、経済取引を捉える場合、仕訳によってそれを行う。すなわち、仕訳は会計的測定の出発点と言えるものであり、きわめて重要な概念である。

また、仕訳には、特定のルールがあり、初学者にとって障壁となる場合も見受けられる。しかし、そのルールを１度習得すれば応用力もつき、会計学に対しての興味もより深くなってくるものと思われる。言い換えれば、仕訳の理解は、会計学習得のためには不可欠なものと思われる。

以下、仕訳の理解についての指導法について検討する。

３．２　仕訳カードの利用

ここでは、点字使用者を対象にして、仕訳の理解を検討する。１枚の用紙にひとつの取引と、それに対応する仕訳を点字で記入し、点字カードを作成する。基本的・典型的取引について当該カードを作成し、繰り返し触読することにより、また、自らカードを作成することにより仕訳の理解が深まるのではないかと思われる。

元来、仕訳を習得するには、普通仕訳帳への記入の繰り返しという作業が必要である。点字の場合、一定形式の書類への記入になじまないものである。このため、普通仕訳帳への記入の代用としてカードの利用は、有効ではないかと思われる。

また、仕訳カードを使用することにより、点字使用者にとっても、より明確に仕訳をイメージできるようになるのではないかと思われる。すなわち、会計学の通常の点訳版では、点字の特徴から、他の文書との区別が明確にはできにくく、仕訳が活字版のそれと異なり、他の文書に埋没してしまう傾向があるからである。さらに、借方は左側・貸方は右側に記入するといった元帳への転記および財務諸表との関係で非常な意味を持つ事項も理解しにくいからである。点字表現を工夫することにより、この問題点は、ある程度解消することは、可能ではあると思われる。また、カードにより学習することにより、その問題点はよりすみやかに解消できると思われる。

３．３　具体的なカードの作成

３．３．１　カード用紙について

当初の想定では、Ｂ６版のカード（一般に情報カードと呼ばれているもの）を考えてみたが、試作の結果Ｂ５版の通常の点字用紙を使用することとした。

カードには、ひとつの取引と、それに対応する仕訳を点字で記載する。Ｂ６版の用紙では、仕訳における借方・貸方に記入する勘定科目の数がそれぞれひとつずつであれば問題はない。しかしながら、それ以上となると、点字の特徴である行数の費消の激しさから記入不能となるのである。取引例と仕訳の間に区切り線を引くことも考え、少し余裕があるが、Ｂ５版の点字用紙を使用することにした。

３．３．２　記載様式と点字表現

１枚のカードに、ひとつの取引、それに対応する仕訳を記載するのであるが、点字用紙に取引・区切り線・仕訳の順に記載する。取引の記載の後、１行開け区切り線を引く。そして、また、１行あける。そして、仕訳を記入するのである。このことにより、仕訳自体が際立って、その理解に資することができる。

取引の記載にあたっては、文章の簡潔化が必要になる。Ｂ５版といっても、やはり行数に制限があるからである。字数を考慮すると、書き出しの２枡あけは考えないことにする。また、取引のナンバーは、点字板における左上のページ記入の場所を使用し、本文中には記入しないものとする。これも行数の節約になる。

仕訳は、前述の区切り線の下に記入する。以下、点字については、カタカナで表現し、点字板については３２枡１８行のものを使用することを前提として論述する。

区切り線の下２行目１枡目から（カリカタ）また１７枡目から（カシカタ）と記入する。次の行の３枡目に借方記入すべき勘定科目を記入する。また、同じ行１９枡目から、貸方記入すべき勘定科目を記入する。さらに、次の行に借方勘定科目の金額を５枡目から記入する。また、同じ行に、２１枡目から貸方勘定科目の金額を記入する。

前述の点字記入によって借方の勘定科目と金額は、点字用紙の左側に、貸方勘定科目と金額は、点字用紙の右側にあらわすことができるようになるのである。

３．４　仕訳カードによる指導法とその効果

前述の仕訳カードを使用して指導を行う場合、どのような取引について作成するかが問題となる。取引については、典型的・基本的なものを用意すべきと考える。ここでは、仕訳の基本の理解を目指しているからである。

具体的には、「収益の計上」・「費用の計上」・「資産の購入と売却」・「負債の借り入れと返済」・「資本の増加」等の典型的な取引について事例を作成すればよいと思われる。

指導方法としては、指導側が準備する方法と、学生自らが仕訳カードを作成する方法がある。この両者を適宜組み合わせていく必要がある。

この指導法を繰り返すことにより、仕訳の様式のイメ

ージ化を通じて、借方記入・貸方記入の理解が促進されると思われる。つまり、借方記入が左側への記入で、貸方記入が右側への記入ということを強くイメージ化できるのである。これにより、資産の増加は借方、左への記入であり、負債の増加は貸方、右側への記入であるということを、より容易に想起しやすくなると思われるのである。

また、この左側・右側記入の明確な理解は、以下に述べる簿記一連の流れを通じて作成される財務諸表の各勘定科目への影響と、関連性への理解を助けるのである。特に、貸借対照表においては、報告段階のものにおいても、借方、すなわち左側に資産が掲記され、貸方、すなわち右側に負債・資本が掲記されており、仕訳との関連性が明確に理解できると思われる。

以上から、仕訳カードの使用は、仕訳の意義の理解の促進に効果的ではないかと思われる。また、仕訳自体の正確な理解は、会計学における諸理論の習得にあたっても、仕訳といった具体的な会計処理の様式を想起する事により、その理解を促進する効果を有すると思う。

４．簿記一連の流れの理解に関する試案

４．１　概要

簿記一連の流れとは、前述の仕訳を起点にして、総勘定元帳への転記により総勘定元帳を作成し、さらに、財務諸表作成の基礎データとなる試算表作成までのプロセスを意味するものとする。換言すれば、簿記一連の流れとは、一定期間の取引を記録した仕訳帳（または仕訳伝票）から勘定科目別に金額を集計し、さらに、勘定科目の一覧表たる試算表を作成するまでのプロセスといえよう。

元来、視覚に障害のない場合は、転記という作業を自ら行うことにより、この簿記一連の流れを理解し習得していくのである。一方、点字使用者の場合、転記といった一定様式の書式への記入が困難である。このため、指導にあたって、それを補償する必要があると思われる。ここでは、点字による仕訳を前提として、総勘定元帳への転記に代替するハイリングを検討する。

また、点字により試算表をどのように表現するかも合わせて検討する。これは、前述した点字には、なじみにくい表形式のものへの対処となる。

４．２　簿記一連の流れの理解方法

簿記一連の流れを習得するための転記の代替として、仕訳のみを記したカード（以下、簡易仕訳カードと称す）を使用する。それを借方貸方別に集計するため、借方・貸方別に切断して、さらに、勘定科目別に集計することを目的にして、ファイリングをおこなう。そして、勘定科目の一覧表である試算表を点字で作成するのである。

このことを通じて、仕訳から試算表までの流れが実感できると思われる。これを、ある程度繰り返すことにより、上記プロセスをより深く理解できると思う。講義などでの口頭の解説では、この流れの理解は、なかなか困難であると思われる。以下、具体的に検討する。

４．３　具体的方法

４．３．１　簡易仕訳カードの作成

簡易仕訳カードは、前述のように、仕訳のみを記載したものである。ここでは、用紙としては、Ｂ６版のもの（一般に情報カードと呼ばれている。）を使用する。仕訳の点字表現については、前述の仕訳カードでのものを、そのまま使用する。さらに、このカードを借方・貸方別に分類するため、カードの中央に左右に切断するための切り取り線を施しておく。この切り取り線は、カッターナイフなどで、作成すればよいと思われる。また、切断したときに、左右どちらかが認識しやすいように、カードの上部の両端を斜めにカットしておくことも必要である。

簡易仕訳カードに記載する仕訳は、簿記一連の流れの基本を集中して理解するため、作業をなるべく単純化し、借方・貸方に勘定科目が複数にならないようにする。

以上の点に留意して、簡易仕訳カードを作成する。

４．３．２　ファイリングについて

上記の簡易仕訳カードを典型的な取引について作成し、それを勘定別に集計していくために、各勘定科目別のファイルを作成し、そこにカードをファイルしていくのである。これは、元帳への転記の代替となる手続きである。

このファイリングには、クリアファイルを使用し、見開きをひとつの勘定科目とし、左を借方、右を貸方として、それぞれの上部に勘定科目名と借方・貸方の別を点字テープで表示して完成させる。また、この方法以外にも封筒を左右に２枚おき、中央をテープ等で接着して作成しても可能である。このファイルに前述の簡易仕訳カードを勘定科目別に、借方のカードはファイルの借方の部分、すなわち、左側に差し入れ、貸方のカードは、ファイルの貸方の部分、すなわち、右側に差し入れるのである。

４．３．３　試算表の作成

上記ファイルを元に、各勘定科目別に集計し、それを一覧表にまとめて試算表を作成する。用紙はＢ５版の通常の点字用紙を使用する。点字の表現としては、借方は左・貸方は右ということを明確に示すため、次のような

様式で作成していく。

点字用紙の１行目に５枡目から、「カリカタ」、２１枡目から「カシカタ」と記載する。そして、２行目から借方項目となる資産・費用項目は、勘定科目名を１枡目から記入し､その１行下に金額を３枡目から記載していく。これを資産項目･費用項目の順で記載していく。さらに、資産項目・費用項目の中の各勘定科目の順は、財務諸表の順に合致させていくほうがよい。

また、貸方項目である負債・資本・収益項目は、この順により２行目の１７枡から勘定科目を記載し、その１行下の１９枡からその金額を記載していく。各項目の順は、借方項目と同様に、財務諸表と合致させる。

この方法により、作成された試算表は、借方項目は左に貸方項目は右に、明確に分割されて表現される。これは、活字版のそれと同様となり、触読によっても明確に表のイメージが理解できると思われる。

４．４　指導法とその効果

簿記一連の流れの理解についての指導法の第一法は、簡易仕訳カードを指導側が準備して、それを学生に配布し、その後の学生の作業を指導していく方法である。すなわち、典型的な取引について、指導側が簡易仕訳カードを用意する。学生は、借方・貸方別に集計するため、カードを中央で切断する。そして、総勘定元帳の代替であるファイルに勘定別に集計のため､ファイルしていく。そして、各勘定科目別に集計する。勘定科目の集計にあたっては下書き用紙としての点字用紙を使用すればよい。その集計結果をもとに試算表を作成する。試算表の作成のプロセスは、下書き用紙からファイルの勘定科目の順番を正しく作成し、その順に下書き用紙の記入を行っていけばさして困難ではないと思われる。このようにして、試算表を作成する。

また、この場合は、期首残高のある科目、つまり、貸借対照表項目については、あらかじめ、各ファイルの所定の位置に、その金額を示した点字カードをファイルしておくことが必要となる。

指導法の第二は、期首残高のデータと取引のデータのみを与え、すべての作業を、学生側に行わせ、それを指導していく方法である。すなわち、学生は、簡易仕訳カードの作成から試算表の作成まで、すべてを自ら行うのである。指導側は各作業において、適宜、指導を行っていく。この第二の方法は、第一の方法に比して、簿記の学習の程度が、進んだときに行うとよいと思われる。以上の方法を、適宜組み合わせて指導していく。

以上により、学生は自ら簿記一連の流れを実感し、深い理解を可能ならしめる。この実感は、転記により総勘定元帳を作成し、それから試算表を作成することと何ら変わらない理解を得ることができると思われる。各作業において、試行錯誤を繰り返しながら、試算表を作成していくことにより、簿記一連の流れの基本を習得できることになる。

また、学習の段階の進行によって、決算整理事項を追加して、財務諸表まで作成することも、この方法を応用すれば可能である。

この作業を経験した後、さらに複雑な帳簿組織に関する講義を行っても､基本的流れの理解ができている限り、深い理解が期待できることとなる。さらに、会計学を習得する際にも、簿記一連の流れの理解は効果的であると思われる。

５．結び

以上、点字使用の学生を対象にして、会計学を習得するために不可避な技術である簿記における基本的概念の習得を目指し、試案を掲げ検討してきた。この方法を実際の教育に適用することにより、視覚障害学生の簿記の教育を促進し、さらに、会計学習得への一助としていきたい。

しかしながら、現状ではこの指導法は検討段階であり、改良すべき点は多数あると考える。講義での実践を通じて、より適切なものとなるよう継続的に検討・改善していく所存である。

A Teaching Method of Bookkeeping for Braille Students
－Use of Classification Cards and Simple Classification Cards－

Katsumi OOHASHI [1], Masao KUMA [2]

[1] Guest Researcher ,Tsukuba College of Technology
[2] Department of Computer Science,Tsukuba College of Technology

Abstract : We propose the use of the specially deigned classification cards for teaching bookkeeping to braille students. It lets them understand classification and flow of treatment of bookkeeping.
The classification cards were used in regards to understanding of classification. They can understand classification by using the braille. The simple classification cards and the method of filing was provided in regards to understanding of flow of treatment of bookkeeping. They can understand flow to trial calculation table from classification by using the braille.
We believe this method which is taught based on these cards and the method of filing, are easier to understand for braille students compared to those which do not use these devices.
Key Words : Braille, Flow of the treatment of bookkeeping, Classification cards, Trial calculation table